来月の人権に関する月間・週間・記念日　３月　「自殺対策強化月間」・・・　９月は自殺予防週間　３月は「自殺対策強化月間」

十島村教育委員会だより　令和５年２月号

しわやかトカラ情報

南北１６０km
「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL　099-227-9771

写真：小宝島小・中学校
縄跳び大会の記録

卒業式まであとわずか！子どもの困り感の理解を！！

十島村教育長　木戸　浩

中学校３年生と，山海留学生の中には３月で島を離れる人がいます。各学校では卒業式の練習も行われはじめているようです。コロナ禍で３年間過ごしてきて，マスク生活が続きました。お互いの顔を見られずに表情を読み取れなかったということもあったかと思います。卒業式は児童生徒の皆さんは，本人及び保護者の判断になりますが，マスクを外して臨むことになります。友達の笑顔をしっかり瞳に焼き付けてほしいと願っています。

１　言葉と行為の関係性から

子どもの中には,同じ学年の友達よりも語彙が少なく，表現の仕方が未熟な子どもがいます。それでも，相手に伝えたいとか，分かってほしいという思いが，実は他の誰よりも強いということを，その子の表情や動きをじっと観察していると痛いほど伝わってくることがあります。伝えたい，分かってほしいけど，うまく言葉が見つからない。心の中に言葉はあるけれど，相手への感情や整理のつかない複雑な心境から，それを口に出すことをためらっている子どももいます。

嬉しいことや楽しいことばかりではなく，うまくいかない悔しい思いをしたり，自分の思いが相手に伝えられなかったりなど，フラストレーションの溜まる体験をするのも集団の中で生活しているからこそです。そうなった時にどうするか？　いろいろなタイプがあるようです。学校でよく目にするのが，人を困らせるような行動に出るというタイプの子どもです。親や教師，特定の友人，あるいは学級集団へなど，その矛先は，フラストレーションの種類によっても変わってきます。

◎　「いい子」に隠された心配な側面

自分の思いを他者へ，言葉で謙虚に伝えられる子どもへは比較的対応は容易です。しかし，それはしないけれども自分の中で昇華することが上手な子どもがいます。親や教師にとっては，従順な印象があり，ほとんど困りごとがないので助かる存在です。ところが，自己昇華ばかりを続けていくことに慣れてしまった子どもには心配なことがあります。いわゆる「いい子症候群」と呼ばれるタイプの子どもです。

このタイプの子どもは「いい子」でいることに過剰に適応してしまい，感情がマヒしてしまっているとも言われています。親や教師，周囲の機嫌を損ねないよう，常に周囲の顔色をごく自然にうかがいながら期待されている「答え」を先取りして行動しているうちに，自分の意思で行動しているのか，気持ちを抑えて行動しているのか分からなくなってしまっているのです。自分の考えがあるけれど主張できないのではなく，自分に考えや気持ちが存在すること自体に気付けていないらしいのです。

そして，「いい子」を演じているという自覚のないまま，この状況が当たり前だと思い込んでしまっている，そこがこの症状の怖いところだと言われています。がまんをしたり，自分の意思を抑えたりすることは，多少は必要だと思いますが，行き過ぎた抑制は子どもを生きづらくさせてしまいます。子どもを，期待に応え過ぎる「いい子」にし続けないよう十分に配慮していくことも親や教師，そして周りの大人たちにとっても大切です。

２　様々な困り感とは

その子の特性により，「困り感」は千差万別に違ってきます。例えば ① 音や明るさに敏感過ぎる。② 気に入った何かを持ち歩かないと不安である。③ 集中すると回りのことに何も気が回らなくなる。④ するべきことがいくつかあると，どうすればいいのか分からない。⑤ こだわりが強く，あるべき物がそこにないと困る。⑥ 予定したことが急に変わると，我慢できなくなって困る。⑦ 抽象的，あいまいな言い方をされると，何を言いたいのか分からず，困ってしまう　などがあります。まわりも困りますが，一番困ってしまうのは本人そのものです。今もそうですが，来年度も「困り感」を抱えた児童生徒が入ってきます。その一人一人の困り感をしっかり受け止めて，だれもが楽しく学校に通うことができる，自己有用感を持てるようにお願いしたいと思います。

「マフラーを巻いてくれてありがとう」

「マフラーを巻いてくれてありがとう」という台詞は、漫画の一コマです。令和という年が始まって、４回目の年が終わり、５回目の年を迎えました。

令和４年１１月１７日「鹿児島県法人会連合会女性部会」の方々から、今年度も雑巾を贈っていただきました。

平成１５年から、鹿児島県下全域で一枚一枚手縫いで雑巾を贈ってくださっています。今年度は、口之島小・中学校と平島小・中学校に送っていただきました。子ども達はその思いを感じているかのように一生懸命掃除をしています。カーネーションやクリスマスケーキ等、たくさんの方々から支えられています。これからも、心の中で「人の思いや願いに感謝する気持ち」を持ち続けて欲しいと願っています。

【雑巾贈呈式】

【平島小・中学校】

【新聞に投稿】

令和５年2月５日 南日本新聞「若い目」掲載

「ともだちがきたよ」

平島小一年 にし山　せいのすけ

三学きから、あたらしいともだちがきました。二年生のせいしろうくんです。

ぼくは二学きまでは一人のきょうしつでした。だけど、せいしろうくんがきたから、二人になりました。学校が、もっとたのしくなりました。

二人になって、うれしかったことがあります。それは、休みじかんに、いっしょにあそべることです。けん玉をするのがたのしいです。

そして、ひる休みに、ドッジボールを小中学生みんなでするときに、人ずうが、ふえて、もっとたのしくなりました。これからも、なかよくしていきたいです。

令和５年１月２８日南日本新聞「若い目」掲載

「かけがえのない存在」

口之島中一年 濱田　怜

授業でいじめがテーマのドラマを見た。内容は、友人同士のいじめを止められずに見ているだけだった主人公が、勇気を出して止めに入るというものだった。

同級生からひどい言葉をぶつけられても、黙って耐える友人を、主人公は心配しながら見ていた。しかし、なかなか行動に移すことができなかった。いじめをなくす難しさを感じた。

その後の話合いで「いじめている生徒に何か事情があるように思えた。だからといっていじめをしていい理由にはならないけれど」という意見もあった。もしもその生徒に、周りが「最近どうしたの？」と声をかけていたらどうだったろうと、考えさせられた。

以前、人権に関する授業を受けた。僕らは、一人一人考えていることや感じていることがちがうからこそ、互いによく話し合うことが大切だと学んだ。

自分は、周りの人を大切にできているだろうか。誰もがかけがえのない存在なんだ、ということを忘れないようにしたい。

子供のうた

令和五年一月十日南日本新聞掲載

だれの音

カサカサ　カサカサ
だれの音
とかげがかくれる音
だれにも見つからずに
すばやくうごくとかげ

バサバサ　バサバサ
だれの音
バッタのとぶ音
だれにもつかまらずに
空たかくとびはねるバッタ

きみのまわりにも
だれかがかくれる音

（宝島小二年　本名　福竹）

十島村で学ぶ

【今の自分と未来の自分】

中之島小学校6年　久木山　陽

私は、「未来の自分はどんな仕事をして、どうあるべきか」ということで困っています。それは、やりたい仕事が三つもあるからです。一つ目は、保育士です。理由は、子供の笑った顔が見たいからです。そして、私は、子供の世話が好きだからです。

二つ目は、自衛隊です。理由は、自衛隊の本を見たときに、災害救助の姿がかっこいいと思ったからです。同級生の書いた、自衛隊の作文にも感動しました。

三つ目は、消防士です。理由は、テレビ番組で、消防士の訓練の様子がかっこよかったからです。そして、消防士と自衛隊は「人を助けて頼られる人になりたい」という思いがあり、保育士は「人を育て成長しているところを見たい」という思いがあります。どれも私と同じく、他の人の役に立ちたいという思いがあるので、どの仕事を選ぶべきか、自分はどうあるべきか悩んでいます。

今の自分は、大事な場面で勇気を出せていません。未来の自分は、仕事をして誰かを助けている人でありたいと思っています。そして、過去と今の自分を比べて、成長したなと思えるようになりたいです。

今は、できていないことも多いけれど、一歩ずつ前進して、「誰かを助ける仕事につき、誰からも頼られる人」になれるように生きていきたいです。

【宝島小・中学校からのメッセージ】

事務職員　堂園　翔太

昨年の１０月、３年振りに宝島を訪問しました。約１２時間弱の乗船を終えて目に飛び込んできた宝島の雄大な自然やどこまでも続く透明な海は、その乗船での疲れを一気に吹き飛ばすほど圧巻で美しい景色でした。また、学校では普段見られない児童・生徒の様子を見ることができ、校舎内の見学もすることができました。なかなか接することのない機会に触れたことで、日々の業務が学校としっかりつながっていることを実感するとともに、十島村の小・中学校の事務職員としての役割を考えさせられたとても貴重な時間を過ごせたのではないかと思います。

さて、今年で事務職員５年目を迎えます。最近読んだ小説の台詞に「世の中には理屈の通らぬことや、理不尽なことが山のようにある。そんな苦痛に満ちた世界を生きていく上での最良の武器は、理屈でも腕力でもない。ユーモアだ。（夏川草介著　本を守ろうとする猫の話）」とあり、これは仕事にも通用する台詞だと感じました。正直、勉強不足もあり失敗の多い日々です。また、十島ならではの困難に直面することもたくさんあります。しかし、時にはユーモアをもちながらそういった困難な状況を面白く捉え、様々な視点から職員や学校を支えていけるような事務職員になれるように日々努めていきたいと思います。

『教職員仲間であるあなた』への　私からのメッセージ

いつも様々な面で大変お世話になっております。なかなかお会いする機会がありませんが、今後ともどうぞよろしくお願いします。